

某『図書館戦争』ってこんな話だと思っていた

八重代かりす

シヤハラザードは屹立するその姿にほっとした。  
西方は荒廃していると聞いていたが、流石にここは無事だったようだ。  
夜明けとともにその威容を表していく。

——アレクサンドリア図書館

一言で図書館と言っても、その規模は雄大無比だ。公文書館、博物館、薬草園なども併設されており、それだけで一大学術都市を成している。

「ああ、ここならばきっと……」

シヤハラザードが感極まった直後、鈍痛が走った。

いきなり背後から棒でぶん殴られた——と気付いたのは後になってからだ。

\*\*\*

目が覚めると、そこには一組の男女がいた。

男の方はかなり大柄で筋骨隆々としているが、朴訥そうな顔立ちをしている。質素だが清潔なスキタイ風の純白で全身をきちんと包んでいるあたり、温厚な農牛を髣髴とさせる。そして、女の後ろに控えている。もっと言えば、女の影に隠れているように見えた。前述の通り、男は大柄なので、女の影に隠れるなど物理的に不可能なのだが、しかし、隠れているように見えた。そこでシヤハラザードは『ああ、奴隷なのね』と気付いた。

女の方は男と真逆だった。つまり『あ、お嬢様だ』と確信させる気風がある。もっと言えば、幼げで生意気そうな顔立ち——だが、同時に鋭いまなじりの美人である。身なりも純白清潔なのは、男と同じだったが、こちらは銀細工の装飾をジャラジャラさせている。

しかも、彼女が纏っているのは薄地の長衣ベテロスのみである。当然、その肢体の曲線が透けている。おまけにそれをギリシヤ風に潔く巻きつけているだけ。なので、二の腕や太腿の肌色が丸出し。緩めの胸元からは膨らみがちらちらと見える。

だが、彼女に恥じらいの色はない。

堂々と両手を組み、大股で立っている。

間違いない、彼女は貴族か何かだ。男の方はお抱えの奴隷なのだろう。そして、

「じめん」

開口一番、彼女は謝罪の言葉を口にした。

「連中が払暁奇襲を仕掛けてくるって、情報があつてね。てっきり、その先兵かと思って。つい

うっかりやっちゃったの」

「ついうっかり——で、私のような弱い女性を無警告で殴打したと……？」

「最近ピリピリしててさ。いや、悪かったわ」

シャハラザードは皮肉を言ったつもりだったが、眼前の女性にはまるで通じなかった。その上、謝っているのに何故か偉そうである。むしろ、後ろに控えている奴隷男の方が申し訳なさそうな顔をしている。

「これ、あなたの荷物よ。謹んでお返しするわ」

そう言って、彼女はシャハラザードに手荷物を渡す。目覚めたばかりで、まだ朦朧としているシャハラザードは「ああ、どうも」と素直に受け取ってしまったが、よく考えてみれば……、

「……淑女の荷物を勝手に漁ったのですか？」

「淑女らしからぬものが入っていたけどもね」と、彼女はくつくつと笑った。「でも、おかげで誤解が解けた。よかったよかった」

「……意味がわかりませんよ。誤解って何がですか？」

先程、払暁奇襲と言っていたが、それではこの図書館を襲う連中がいることになる。誤解とはシャハラザードがその『図書館襲撃派』の一味だという誤った理解だろう。しかし、荷物を検査して（おそらくその『図書館襲撃派』とは所持品構成が違っていたから）、その誤解が正された。そこまでは推測できる。推測できるのだが、その『図書館襲撃派』というのが今一わからない。このアレクサンドリア図書館は世界最大の図書館だが、所詮は図書館である。奇襲も何もない。それとも何か？ 図書館が戦争でもしているというのか？

シャハラザードが怪訝に思っていると、彼女はその辺りを朗々と語りだした。

「そう、うっかり邪教軍団の手先と勘違いしてね」

「じゃ、邪教軍団？」

「いえ、過激な新興宗教団体ですね」とさすがに奴隷が補足する。「確かに、胡散臭いというか、オカルトっぽいというか、すぐ暴徒化するというか……」

「どこのつまり、ろくでなしのクズどもが群をなして、人様に迷惑をかけまくってのよ。これは異教徒の本だから燃やせーとか、**青少年健全育成**に反するから燃やせーとか、**非实在児童**の人権がどうのこうので燃やせーとか」

「……えっと、要するに放火魔ですか？」

「そうよ」

断言するヒュパティアに対し、奴隷の方は再び補足した。

「いえ、ですから新興宗教です。えーとたしか……」

【救世主キリスト】とか名乗る邪教軍団よ」

その一言にシャハラザードの心臓はトクンと高鳴った。だが、生憎男女二人に気付いた気配はない。

女性の方が一人で興奮しているらしく、「不道徳な表現が犯罪を誘発する？ そんな統計が一つでもあるっていうの？ そりゃ、犯罪者は自己弁護のためにいくらでも責任を自分以外に求めるでしょうけど。そうやって、犯罪者を甘やかす態度の方がよほど犯罪を誘発するってーの。大体、そんな事を言ったら、あんたらのいう【聖書】だって、強姦、虐殺、背信と不道徳な表現で一杯じゃないの！ いや、あれはあれで面白いんだけどさ。つーか、あいつら、ちゃんと【聖書】読んでいるの？ ああ、もう腹が立つ！」と文字通り地団駄を踏んでいる。

ちなみに彼女は元々大股だ。しかも裾がヒラヒラな薄着でそういうことをやる。当然、太腿はおろかお尻ですら見えそうになって、シャハラザードとしても目のやり場に困る。

奴隷の方もやはり困ったらしく、視線を泳がせながら彼女を諫めた。

「お嬢様、あの……はしたないですよ」

「……はしたない？ 何が？」

彼女は本気でわからないという顔をした。奴隷は頬を染めて「だから、その……」と口ごもる。なるほど、貴族だな——とシャハラザードは苦笑した。彼女は彼の前でなら、全裸になっても恥じらうまい。奴隷など家畜と同じで羞恥の対象にならぬ——まさに貴族だ。

ところがそんな彼女は急に思いついたように怒りだした。

「ていうか、お前、何度言わせるのよ。『お嬢様』ではなく『館長』と呼びなさい」

その訂正にシャハラザードは思わず小首を傾げた。

「館長？」

「そ、あたしがこのアレクサンドリア図書館館長のヒュパティアよ」

自慢げに語る彼女こそ、アレクサンドリア図書館で最初の女性館長なのだと理解するには少し時間がかった

そして、男女を問わずアレクサンドリア図書館で最後の館長だったのだと絶望するにはもっと時間がかった。

\*\*\*

「シャハラザード？ ペルシア人？」

「そんなところですよ」

「そんなところ？」

ヒュパティアは胡乱な眼でこちらを見た。どうも表情も豊かな方らしい。

「実は色々ありまして、出生地がよくわからない事になっているのです」

「……ふうん。まあ、殴ったのは悪かったし、詮索しないで上げるわ。——それで我がアレクサ

ンドリア図書館に何の御用かしら？」

シャハラザードは懐から一片の木片を取りだす。

そこにはこんな一節がある。

——倉廩實則知禮節、衣食足則知榮辱

さすがのヒュパティアもこれには顔をしかめた。とはいえ、

「何これ？ 象形文字？ いいえ、待つて……確か東方から衣料輸入品の箱に——そう

【絹の国】の文字？」

というところまで突き止めたのだから、大したものだ。

「ご明察。いわゆるシナ語ですね」

「……まさかあなたはこれを読めるの？」

「倉廩満ちて則ち礼節を知り、衣食足りて則ち榮辱を知る——といったところでしょうか？」

シャハラザードが拙いギリシヤ語訳を披露すると、ヒュパティアは二重の意味で驚いたらしい。

「……大したものね」

「ええ、この前見つけた木簡の一節なのですが、感動しました。きっと名のある書の一部に違いありません。だから、甥っ子への土産にしようと思ったのです。ところが出典がわからないので、それをここで探したいのです」

「……試みに聞いておくけどさ。どうして、この一節があなたの甥への土産になるわけ？」

「この一節には人間の優しさと強さが込められています。まさしく至言です。そして、甥はこの言葉のような人柄だからです」

第一に優しさがある。

それは飢えや病ゆえに礼節も榮辱も顧みない者には、救いの手を差し伸べねばならぬという他者への慈しみだ。

第二に強さがある。

それは貧しい者を見下してはならぬ、豊かに育った故の驕りに陥ってはならぬ、そして、貧しくとも正しいのだという下らぬ自己満足で赤子を殺してはならぬという自身への戒めだ。

「世の中に本当に悪い人なんていない——そう、心から思っている強く優しい男の子なんです」

「……とんでもない甘ちゃんね」

シャハラザードはクスクスと笑った。「でも、そんな彼を狷介固陋と呼ぶ輩も多いのですよ」

この一節は精神論の否定に繋がる。あるいは現状を打破しようという志の高さに繋がる。

「その峻烈さが時に人を遠ざけるのでしょうか。ああ、そういえば」

「何？」

「いえ、何でもありません……」

「でも、いいわねえ。『貧しくとも正しいのだ』という下らぬ自己満足で赤子を殺してはならぬ」  
かあ。実に素晴らしい。幾千幾万の星霜を超えて残るべき箴言ね」

と、木簡の一節にうっとりとするヒュパティアの姿は、やはり同類に思えてならない。  
だが、その清冽な娘の中に汚濁が影を差す。

「まったく、あの連中に聞かせてやりたいわ」

顔を顰めたヒュパティアは醜い——とシャハラザードは思った。

「……しかし、先程の話、今一わかりません。そのキリスト教とやらは、ナザレのイエスこそが救世主キリストであるとする宗派なのでしょうか？」

「そうよ」

「ナザレのイエスといえば、虐殺されそうになる貧しい売春婦を庇ったり、電波指令に基づいて神殿の露天商を追い出したり……中々気骨のある男と聞いていましたが」

「今じゃあ、売春婦を進んで殺して回っているわ」

「それは酷い」

ちなみにそれは奴隷が「いや、露天商も少しは愛の手を……」と口を開いた時だった。

## 「なくそう！【有害図書】！」

と、図書館の外から大声が飛んできた。

「アレクサンドリア図書館は【有害図書】の製作、供給、消費の主要な拠点となっている！」

「【有害図書】に誘われた青少年の多くは知らず知らずのうちに心を破壊され、人間性を失っており、既に幼い少女が連れ去られ殺害される事件が起きている！」

ヒュパティアは肩をすくめる。

「ほらほら、あいつらよ」

それだけではよく意味がわからないので、シャハラザードは困ってしまった。すると、奴隷が慣れた様に補足説明してくれる。

「ええと、実は最近アレクサンドリアの総主教が強硬派のキュリロスという男になりまして……彼がこの図書館の蔵書に……その……問題があるということ……」

「【有害図書】は燃やせて要求して来たの。当然、突っぱねたわ。そしたら、翌日からアレが始まったってわけ」

「……ご冗談でしょう？ この図書館の蔵書は帝国の……いえ、人類の宝ですよ」

「とはいえ、連中には前科があるからね。『異教徒』の施設への破壊活動、『不道德』な祭礼への

妨害工作には熱心だから。というか、この図書館も分館が何度か放火されているし」

最初、シャハラザードは理解が追いつかなかった。自分のギリシャ語能力に疑いを抱いたぐらいいだ。

「待って下さい。たしかに今の皇帝はキリスト教徒です。キリスト教徒の行動が大目にみられる事はあるでしょう。しかし、図書館への放火は明確な犯罪ではないのですか？」

ヒュパティアは深々と溜息をついた。物分かりの悪い教え子に対するように、彼らを指差した。「見ればわかるわ」

シャハラザードは恐る恐る窓から大声の方に目を向ける。

それは図書館の外から——それが彼らの最後の理性だろう——抗議する者の群れだった。抗議には侮辱や脅迫に近いものがあつたが、シャハラザードが驚いたのはそこではなかった。

「あれは……宗教家だけでなく、警察官まで参加しているのですか？」

「……そうよ。『アレクサンドリア図書館にある数多の【有害図書】が犯罪を誘発させ、治安を悪化させている』という名目でね」

「治安が悪くなっている——というのは、比較材料が乏しいので何とも言えません。とはいえ、旅の途中、盗賊集団を見かけた事があります。運よくやり過ぎす事が出来ましたが、正直ゾツとしました。だから、彼らの平和を望む気持ちはよくわかります。……しかしそれなら、この図書館の検閲や焚書に回す労力を、その手の犯罪者を駆逐するのに使うべきなのでは？」

「使うべきでないらしいわ。彼らにとっては、現実の犯罪者を駆逐するよりも、架空の犯罪者を根絶する方が大事なんですよ」

「架空の犯罪者——本の中の犯罪者を根絶やすために、現実に存在する犯罪者を見逃すと？」

「……それが宗教よ」

ヒュパティアは諦観しながら放言した。

シャハラザードはヒュパティア程の宗教嫌いではない。だが、今回に限ってはヒュパティアの考えに賛同したくもなる。

この図書館が気に入らないという者もいるだろう。人にはそれぞれの好みというものがある。それはやむをえない。

それだけでなく、このアレクサンドリア図書館は世界史上初の——そして、ある意味では人類史上最も徹底した——『納本制度』を整備した図書館である。アレクサンドリアに入港した船は悉く積荷を調べられ、その中に珍しい書物があれば、没収され、写本され、原本を図書館に保管し、複製を持ち主に返すという過激な手法すらとられる。そうして、集められた書籍の数は十万余とも七十万ともいわれる。当然、その中には彼らの言うところの【有害図書】もあるだろう。

また、ヒュパティア達が（そして、シャハラザードも心情的には既に）図書館を守ろうとするのは、識字階級故の悪癖——つまりは『本が好きだから』であり、道徳的な理由はむしろ後付けかもしれない。

だが、何事においても資源は有限である。甲に力を入れれば、乙が疎かになる——人類不変の原理だ。治安機構においても、予算と人員は常に有限である。だから、架空の犯罪者を追求する事は、現実の犯罪者を跋扈させるのと同義なのだが……一体彼らは何を望んでいるだろうか？

「案外、犯罪組織や悪徳警官があの手運動を後押ししているのかもね。迂遠なやり方だけど、利害は一致しているわ」

この図書館に警察力が注がれる程、『現実の犯罪』の取り締まりは緩くなる。だから、犯罪組織にとって焚書は望ましい。また『現実の犯罪』の取り締まりは面倒な上に危険が伴う。だから、悪徳警官にとって、検閲は好ましい。

「理屈はわかりますが、少し憶測が過ぎませんか？」

「自分でも思うわよ。妄想じみてるって。だけど、あの連中の現実の行動の方が余程妄想じみていない？」

ヒュパティアが言うには、治安が悪くなっているのは虚妄ではなく、一昨日など盗賊団が南の村を襲ったらしい（シヤハラザードが見たのと同じ集団かもしれず、背筋が凍った）。ちなみに馬で駆け付けければ、間に合う距離にいた警邏がその時何をしていたかというところ、『有害図書』を選別する準備だという。荒誕を通りこして滑稽だとシヤハラザードは思った。だが、実際に虐殺された村人からすれば、滑稽では済むまい。

「南の村には、陵辱されつくした女の子の死体があったんだよ——本の中ではなく現実に……」

ヒュパティアはシヤハラザードの苦い顔に気付いたのかもしれない。

「ああ、もう嫌だ。今回は口先だけみたいだから、馬鹿どもは放っておこう」

「そうですね」

シヤハラザードは『今回は』という言葉に深刻な状況を察していた。だが、わざわざ話題を変えてくれたヒュパティアの好意を無駄にもしたくはなかった。

\*\*\*

とりあえず——という事でシヤハラザードはヒュパティアの私室に通された。もともと、仮初にもアレクサンドリア図書館長の私室である。本来『とりあえず』で入れる場所ではあるまい。シヤハラザードが招かれたのは、いきなり殴打してしまった申し訳なさもあるのだろうか……。

——それ以上に私は試されている。

とシヤハラザードは推測した。シナ語を少なからず操れる事が、ヒュパティアをそそつたのは間違いない。

「検索及び閲覧手続きには時間がかかるから、しばらくはここで暇でも潰していい」

シヤハラザードが部屋を見渡すとその品々がすぐ目についた。反射的に口にしてしまう。

「……これは天体観測儀の一種ですか？ それとあれは液体比重計ハイドロスコープというべきものではないか？」

「その通り。あたしが造ったんだけど、なかなかのモノでしょー」

途端にヒュパティアは嬉しそうな顔になった。まるで少女のような無邪気さで、自然哲学者としてはよくいる類である。しかし、シャハラザードはその時の一言を聞き逃さなかった。

——今、この人『あたしが造ったんだけど』と言いませんでした？

どうとでも取れる一言であるが、空恐ろしい一言でもある。その恐れのままに

「……占星術や錬金術がお好きなのですか？」

と尋ねるとヒュパティアは露骨に顔をしかめた。そして、

「あたしは天文学や化学が好きなのよ」

と謹厳な口調で訂正してきた。

——なるほど、これでは宗教家と相容れぬわけだ。

このヒュパティアは明らかに合理主義者だ。さらに言えば、合理主義者であろうとしている。

アレクサンドリアのヒュパティアが同時代の人間から隔絶していたのはこの点である。一応はヒュパティア自身も、分類するならば、新プラトン主義者となるのである。しかし、合理主義を追求し、神秘主義を敬遠——というか、放逐しようとしている点で、他の新プラトン主義者とも一線を画している。

何しろ、テオンの娘Ⅱヒュパティアの言説で残っているのは天文学と数学の関連のみだ。この時代の知識人ならば、必ず行うであろう『哲学論争』の跡がまるでない。

「占星術や錬金術がお嫌いですか？」

「嫌いよ。迷信から事実だけ抽出したら、とっと廃棄すべきだわ。——あんな迷信を真実として教えているなんて、むしろ恐ろしいわよ」

シャハラザードはごくりと唾を飲んだ。

——……この人、既に【ソフィスト哲学者】の領域を逸脱しているんじゃない？

いずれにせよ、眼前の女性がわからなくなってきた。

仕方なく視線を奴隷の男性に向けると、彼も『お嬢様には困っているのです』と視線で返してくる。

「……もしよろしければ」シャハラザードは好奇心のままに尋ねていた。「何か読みものなどはあるでしょうか？」

「おお、こんなところにあたしの幾何学論文があったーっ！」

ヒュパティアのわざとらしい口調の呆れつつも、シャハラザードに否はない。

このヒュパティアが才女であることは間違いなく、その論文には興味があったのだ。

「……まあ、ぜひ拝見したいですわ……」

「どーぞどーぞ」

そんな間拔けなやり取りの末、シャハラザードは紙の束を手にした。思った通り汚い字である。「アポロニウスの円錐曲線？……アポロニウスというのは西洋人特有の言い回しですか？」



「そ、円錐を平面で切断した時に現れる二次曲線の事をそう呼ぶの。具体的には正円とか楕円とかね」ヒュパティアはるんると解説する。「でねでね、あたし、惑星運動ってこの円錐曲線に似ている気がするんだよねー」

そこでシャハラザードはヒュパティアの仮説の深意に気付いた。

「……それって、惑星は楕円運動もしている——と仰りたいんですか？」

シャハラザードの声にはどうしても呆れが混じってしまう。見れば、あの奴隷の男も渋い顔をしていた。

「……うう、婦女子の戯言と笑いなさいよ」

ヒュパティアは縮こまっていた。無理もない。それはアリストテレス以来の宇宙観を根底から否定する暴論なのだ。それは唱える本人が最もわかっているのだろう。

そこでふとシャハラザードは思い付いた。

「しかし、『惑星は円錐曲線軌道をとる』とすると——放物線や双曲線もありえるのでは？」

「え……あ、そっか、軸に対して平行に切断すれば、放物線になるもんね。でも双曲線って？」

「双円錐の軸に対して平行に切断すれば、双曲線でしょう？」

「ああ、そうなるわね」

「双曲線軌道を取る惑星ってなんですか？」

「す……彗星とか？」

「じゃあ、放物線運動を取る惑星って？」

「え……林檎？」

「……………」

その場にいる三人中二人の凄まじい沈黙に耐えかねて、流石のヒュパティアも「……あたしが悪かったわよ」と根を上げた。

「うう……皆であたしをいじめる。……あれ？ でもでも、円錐は三次元で、それを切った時の

平面曲線は二次元だよ。これって要するに次元軸を一本減らしているわけだけど……じゃあ、逆に次元軸をもう一本増やしたら……」

「お嬢……いえ、館長……！」

奴隷が力強く窘めた（一瞬、本音が混じったものの、許容範囲だろう）。

「今のあなたは【テオンの娘】ではない。この偉大なるアレクサンドリア図書館の館長なのです。……これ以上は言わせないで下さい」

それは真摯な諫言であった。気弱そうな奴隷の、しかし、真っ直ぐな目にヒュパティアは怯む。なんとなく、二人の関係が察せられる一幕の後、彼は

「出過ぎたマネをしました。頭を冷やしてきます」

と一礼して、部屋を出て行った。

残された女二人の間には沈黙が漂う。

先に口を開いたのはヒュパティアの方だった。

「ごめん。お客の前でみっともなかったわね」

「いえ……」

「見ててわかったと思うけれど、あいつはお目付け役。勿論、あいつには感謝しているんだよ。あたしって馬鹿だから。今みたいにあいつが歯止めをかけてくれないと、ついつい馬鹿げた事を口走りそうになる」

既に口走った後です——とシヤハラザードは言わなかった。

「わかっているの……本ならさ、あたしの如き馬鹿女にはこの館長は荷が重いって。それがこうもちやほやされる。それ自体がこの図書館の衰退を示している」

ゼノドトス、エラトステネス、アリストファネス、アリストアルコス——そんな偉大な前任には遠く及ばない。そんな劣等感がこの才女にもあるらしい。

「オリンピックも終わっちゃったし……つまらない時代になったものよ」  
ヒュパティアは嘆いた。

\*\*\*

だが——と、ここで後世の目でみれば、自ずと別の評価もあるだろう。

楕円運動の可能性を肯定した時点で、彼女はガリレオ・ガリレイの惑星理解を超えている。

放物線運動の可能性を察知した時点で、彼女はアイザック・ニュートンの万有引力に手を伸ばしていた。

円錐曲線軌道が三次元空間の歪みを二次元平面曲線で表した姿であるように、惑星運動軌道が四次元時空の歪みを三次元空間曲線で表した姿なのだと気づいていたら、アルベルト・アインシュタインの一般相対性理論の嚆矢とすらなりえたであろう。

もっとも、彼女が「この宇宙は四次元なんだよ」と言ったとしても、それは受け入れられまい。何しろ、この千六百年後の日本においても「この宇宙は四次元なんだよ」と語った者は某文藝部では馬鹿にされたのである。

そ・う・鼻・で・嘲・笑・わ・れ・た・の・で・あ・る。

いずれにせよ、未だ可能性に満ちた時代であった。

あの時、シヤハラザードに現代の語彙があれば、【ソフィスト哲学者】とは呼び難いヒュパティアをこう呼んだかもしれないのだ。

彼女こそ、人類最初の【サイエンティスト科学者】である——と。

\*\*\*

\*\*\*

闇の中。

改めて手にとって、確かめる。あの液体比重計も大したものだが、やはり、この天体観測儀は素晴らしい。三角関数が苦手な自分でも、これを使えば、地図測量を楽々こなせる。いや、それどころか、沙漠や外洋でも正確な座標を特定できる。ならば……

「これさえあれば、人類はこの地球を一周することだってできる」

その時のシャハラザードの震えは決して大げさなものではない。

実際、ヒュパティアが造った天体観測儀は後に六分儀が発明されるまで使われるのだ。

その間、実に千年以上！

彼女の力量が——その是非はともかくとして——千年先まで通用するという証左であろう。

「……天才だわ」

「はい。お嬢様は間違いなく歴史に名を残す器です」

背後からの声にシャハラザードは振り返った。

「地球全周二十五万スタディオオン(約四万五千km)——かつてのエラトステネスがはじき出したこの数字、お嬢様ならば『立証』することも不可能ではありません」

件の奴隷は滔々と説いていた。あるいはこの奴隷はヒュパティアの護衛も担当しているのかもしれない。しかも彼は

「それはそのための要——かなめ東方専制君主の手先に盗まれたら、私はお嬢様に撲殺されてしまいます。どうかご勘弁を……」オリエン

とあっさりと述べ、ぺこりと頭を下げた。

シャハラザードは己に嫌疑がかけられている事よりも、こんなに容易く女子に頭を下げる男がいる事に驚いた。

「……随分と心酔なさっているのね」

「はい。もう二十年も前の事になりますが、私はあの方の薬学実験によって命を救われました。

それ以来、心酔しております」

シャハラザードは口調に棘を込めたが、奴隷はあくまで肅々と答える。

だが、そこに苛立つよりも、一つの疑問が浮かんだ。

「二十年前?……待って下さい。それでは今ヒュパティア殿はお幾つなのですか?」

「わかりません。私よりも歳上なのは間違いないでしょう。おそらく三十路をとうに過ぎていくかと」

「三十路過ぎって……あの方はどう見ても二十代、下手をすれば、十代後半でも通用しますよ」

言いながらもシャハラザードは少し納得もした。あのヒュパティアはこの図書館の館長を務めるには若すぎる容貌であるが、しかし、その年齢だけをみれば、妥当なのかもしれない。

それに近代以前の人間は老化が早い。生活環境が過酷であるため、肉体に大きな負担がかかる

からだ。だからこそ、女性の多くは十代で出産するし、二十を過ぎれば適齢期を過ぎたと見なされる。

しかし、例外はある。豊かな生活を送る貴族階級はそれだけ老化も遅い。ヒュパティアもその一人だろう。

だが、奴隷は別の解釈をしたようだ。

「要するに子供なのだ——と私は考えています」

「若い精神が若い肉体を維持すると？」シヤハラザードはいつい自然哲学的な解釈をする。

「たしかに思い込みの力がヒトの生理に影響を与える事はありますが……」

「そうですね」彼はひとまず肯定したもののそれは本旨ではなかったらしい。「それがお嬢様の魅力であり、活力です。しかし、政治家としてそれは短所なのです」

「……あの方は政治家ではないでしょう」

「本人はそのつもりです。またかつてはそれでよかった。親の下で好きな研究に熱中する一介の才女であつたら、若さも武器でしょう。しかし、今やあの方は一介の才女ではない」

そこでシヤハラザードは彼の言いたい事がわかった。

アレクサンドリアのヒュパティアは正直すぎ、潔癖すぎ、勘気すぎ、鋭利すぎる。

——つまりはそれが『若さ』であり、『子供』である。

正直な彼女の言説は信用でき、潔癖な彼女の行動は信頼できる。勘気な彼女の判断は素早く、鋭利な彼女の認識は正しい。これらは人間の美質である。

シヤハラザードはそんな彼女と友人になりたいし、尊敬すべき真理の探究者だと思ふ。

だが、組織の長としては失格だ。政治家としては二流と言つてもよい。

勘気も鋭利も共に才覚の表れである。しかし、こういう天才肌の人間は何だかんだといって、他人に仕事を任せたがらない。自分でやった方が早いから——と部下に任せるべき事まで、自分でやってしまう。実際、短期的にはそちらの方が早く仕事が片付く。しかし、それでは組織の運営などできない。また、他人の無能さがどうしても気になるので、上に立つ者が持つべき度量が持てない傾向にある。

とはいえ、この二点はまだ何とかなる。

致命的なのは正直で潔癖だということだ。短い付き合いでもわかるのだが、ヒュパティアほど、この致命的な善良さを持っている人間は珍しい。彼女は嘘がつかない。嘘をつかないのではなく、嘘がつかないのだ。当然、阿諛追従の類とも無縁だ。

そのため、面と向かって『あんた、馬鹿じゃないの？』とか平気で言うところがある。

それどころか、以前にキリスト教徒の前で『宗教というのはみんなまやかし』と直言までしたという。

これは、当時の知識人なら、誰もが思っている事である。

しかし、当時の知識人なら、口には出さない事である。

言ってわかる奴なら言う必要がないし、言ってもわからぬ奴には言う意味がないからだ。

これは相手が狂信者だからという問題ではない。知識人か否かも関係ない。不毛な——そして、危険な——話題を敬遠するという処世術は『大人』なら、身につけてしるべき知恵なのだ。

「かつて、キリスト教の毒性を看破し、抑制しようと必死だった【背教者】ユリアヌスですら、実権を掴むまではその大志を隠匿し、苦渋の時を過ごしておられました。理想の実現のために、現実にも屈服できた者こそ、【背教者】<sup>アポスタタ</sup>の二つ名を手にし得るのでしょう」

が、『子供』であるヒュパティアにはそれができない。

「無論、『子供』故の有能さもあり、魅力もあります」

よりにもよって、キリスト教徒に向かって真実を直言したヒュパティアは彼らを激昂させた。しかし、そんなヒュパティアこそ、ギリシャローマ文明の最後の希望ではと期待する者たちも、また現れたのである。

この図書館の館長に任命されたのもその一環である。

暴虐なるキリスト教徒への対抗者——その旗頭に祭り上げられているというわけだ。

「……聖女ヒュパティアこそ、知恵の樹の守り人……といったところですか？」

「はい。しかし、彼らもお嬢様の主張を守ろうとはしていませんが、お嬢様の身命についてはその限りではないのです……」

「このままでは、ヒュパティア殿が『殉教者』になると？」

「……私としてはお嬢様の亡命先を確保しておきたいのです。あなたにとっても悪い話ではないでしょう？」

「仮にそうだとしても、ヒュパティア殿本人にとってはどうなのですか？」

すると奴隷は苦笑いをするだけだった。

——つまりはそういう事か。

シヤハラザードには構図が見えてきた。

それこそ、ヒュパティア自身も己の主張は守ろうとしているが、己の身命についてはその限りではないのだ。

ヒュパティアは聡明だ。自分が館長に任命された真の理由も察している。その上で自分に期待された役割を受け入れたのだ。仮に自分の身命が危険にさらされたとしても、この図書館を——人類の英知を守りぬけるならば、それでよしと考えているに違いない。

だが、この奴隷はそれをよしとはできないだろう。

「それにキリスト教徒もただ無知であるだけで、悪逆というわけではないように思えるのです」

「無知は悪逆よりも罪ですよ」

シヤハラザードが断ずると、何故か彼は大いに当惑したようだった。

「……では言葉を変えましょう。暴力から蛮性を除けば、それは活力です。正しく教導できれば、キリスト教徒も人類に貢献できるはずですよ」

それは奴隷がそんな苦渋に満ちた言い方をした時だった。

「お前、こう言いたいのか？『キリスト教徒との敵対関係は、彼らを正しく教導できない馬鹿女の無能が原因だ』と？」

突如現れたヒュパティアは傲然と言葉を放った。

彼女は、灯火を掲げ、闇夜を照らし、つかつかと歩み寄る。

その姿が今はなき【至高の巫女】ウエストリスマキシマを髣髴とさせる。

シヤハラザードですら、背筋が振るえた。奴隷一筋の男は尚の事だろう。

無言のヒュパティアは灯火を台座に移した。植物油による照明が一室を昼のようになる。

次にヒュパティアは一息吸って、いきなり奴隷に向かって駆けだした。ぶつかると思ったその瞬間、跳び跳ねる。そしてそのまま、奴隷男の首に両腕を回し抱きついた。

さすがに奴隷男もぐらつくが、ヒュパティアはその勢いで男の背後に回る。両腕は奴隷の首に回したままである。

ヒュパティアが後ろから奴隷の首を絞める形となった。

無論、ヒュパティアの細腕では大柄な奴隷が窒息するはずもない。身長差もあるので、奴隷の首にぶら下がるような形になった。

じゃれあいのつもりなのだろう。愛する父親に抱きつく幼い少年にも似ている。前述の通り、ヒュパティアの精神はまだ子供なのだと実感させられる。

問題はヒュパティアの肉体は妙齢の女性であり、しかも例の薄着であるという点だ。滑らかな肌とか柔らかな肉の感覚が伝わってくるのか、彼の方が相当に困った顔をしている。

仕方なしにシヤハラザードは助け船を出した。

「……ヒュパティア殿、そんな事では嫁の貰い手がなくなりますよ」

「いいもーん。あたしは既に【真理】イデアの妻だから」

この女、本当にイタいなあ——とシヤハラザードは思った。

「さて、お前の言っている事だが、実に盗人猛々しい」

抱きついたまま、ヒュパティアの顔が鋭利な哲学者のものになった。

「キリスト教徒も正しく教導されれば、人類に貢献できるといふのは事実だろう。それこそ、『倉廩満ちて則ち礼節を知り、衣食足りて則ち榮辱を知る』なのだから。キリスト教徒との敵対関係が続いている原因の一端は、たしかに私の教導不足にある。我が狭量、まったくお前の言う通りである」

「あの、私はとりあえず別室にお暇……」

しかし、シャハラザードの配慮は言い終える事が出来なかった。

「あなたもここにいなさい」とヒュパティアの声は冷たい瞋恚に満ちていたからだ。「犬の如く従順だった男が、初めてあたしに逆らった記念すべき日よ。元・飼い主としては是非とも、この高説を第三者に聞いてもらいたいの」

男の首にぶら下がっている小娘の不思議な威厳がその場を支配する。

「さて、繰り返になるが、我が狭量は認めよう。だが、それと彼らを許すのは別の問題である。

貧困ゆえに窃盗を犯す者のために、貧困を和らげる事は必要であっても、それと窃盗を赦す事は別の問題であるように」

貧困による犯罪は、図書による犯罪と違い、幻想ではない。統計的にもはっきりと立証されている。逆に、貧困を撲滅すれば、犯罪は激減する。これは社会学において珍しく信頼できる普遍法則だ。

だが、それと犯罪を赦すのは、別の問題なのだとヒュパティアは語る。何故なら、原因が貧困であろうが無かるうが、窃盗を許せば、経済活動が阻害され、結局は貧困が蔓延り、それがまた窃盗を呼ぶという悪循環に陥るからだ。

故に根本治療と対処療法は並列同時に行わねばならない。飢餓や不潔が原因で、悪性の腫瘍ができた者には、豊富な食事や清潔な衣服という根本治療を行う必要はある。だが、それは腫瘍を切り取るという対処療法を行わない理由にはならない。

妥協を知らないヒュパティアが、キリスト教徒の態度をさらに硬化させる『環境』である事は認める。しかし、それはキリスト教徒の悪逆を許容する理由にはなりえない。悪性腫瘍と同様に外科手術的に除去するしかない。

「そして、何より、その『環境』を変える意思そのものを否定するところこそがあの連中の悪逆なのだ。この世のすべてが正しき神の意志であり、故にすべてを受け入れる？ 馬鹿馬鹿しい。

貧困も戦乱も神の意志だから受け入れろというのか？——あたしは認めない。努力もなく研鑽もなく、ただ神に祈るだけの墮落を許してはいけない。あるがままの現実に従従するのみの怠惰を赦してはいけない。そも我が図書館に収集されてきた【知識】<sup>グレイセス</sup>とは、世界の災厄に抗うためのイージスの盾であり、世界の不幸を刈り取るためのハルパーの鎌である……！」

興奮した細腕には自然と力がこもり、さすがに男も苦しみ始めた。

ヒュパティアは青くなってきた男の顔に「チッ」と舌打ちをする。名残惜しそうに腕を離し、足を床に付け、少しばかり落ち着いた声音で教諭す。

「ぶっちゃけた話、妥協の余地はない。だって、あたし、この図書館の外の行為には目を瞑っているのよ。逆に言えば、この図書館にしか残っていない貴重書が一杯ある。ここで譲歩すれば、数多の文化や技術が二度と再現不能になる」

そして、ヒュパティアは自身の奴隷をその双眸で射抜く。

「ここであたしが逃げたら、すべてが終わる。この帝国の——この世界の衰退を認めるわけには

いけない」

——正論だ……！」

口には出さなかったが、それがシャハラザードの本音だった。キリスト教徒が憎み恐れているのは、実のところ、この図書館にある大量の蔵書ではなく、この女神の如き哲学者一人ではないのだろうか？ 少なくとも、シャハラザードはヒュパティアに駆け寄り、今すぐ臣従を誓いたいぐらいだ。

だが、男はそこで初めて言葉を返した。

「それです。思うのですが、そもキリスト教が蔓延ったから、ローマ帝国を衰退したのではなく、ローマ帝国が衰退したから、キリスト教が蔓延ったのではないのでしょうか？」

「……あたしの発想は因果関係が逆だと？」

「はい。例えば、彼らはしばしば貧しい者にパンを分け与えていますね？」

「布教活動の一環でしょう？ これは『キリストの肉』だ——とか言っちゃってさ」

「その『キリストの肉』ですが、【小麦法】が十二分に機能し、貧困層へも一定の食料が行きどどいていた頃なら、はたして受け取る者はいたでしょうか？」

ヒュパティアは口籠った。

彼が述べた【小麦法】とはいわゆる『パンとサーカス』と呼ばれる国家政策だ。すなわち、

パン——【小麦法】に始まった貧困層への食料配布等の社会福祉制度。

サーカス——道路網や上下水道、巨大建築物に代表される公共施設整備である。これらのシステムは、帝国の双翼として五百年も機能してきた。

そう、既に過去形なのだ。元来『パンとサーカス』も完璧には程遠い。例えば、食料配布一つにしたところで、対象は都市住民や帝国市民に限定される事が多く、やはり『救済されない階層』というものは存在した。

(とはいえ、【理想郷】とは常に【存在しない場所】である。それを前提に理想に近づく行動が政治である。十人の中で五人しか救われないシステムがあったなら、次は救われる人間を八人にするシステムを採すべきなのだ。十人中五人を見殺しにするのが気に食わないから、現行制度を壊して十人皆で死のうとする馬鹿や、十人中二人を見殺しにする次期制度は耐えられないから、五人を殺し続けるとかほざく阿呆は、早めに首を吊った方がいい)

問題はここ二百年で『救済されない階層』が激増している事だ。

結局、制度疲労しないシステムはあり得ないのだろう。

帝国は衰え、弱者に小麦を与える余力が無くなりつつある。

かつては新興宗教を気味悪がって近寄らなかつた者も、今は飢えを恐れ、『キリストの肉』を貪るようになったのである。

「所詮は困窮している者の弱みに付け込んでいただけでしょう？」

「それで救われる命もあります」男は事実だけを口にした。「あるいは、失ってしまった帝国の



社会福祉の役割をあの宗教が肩代わりしているといえます」

「図書を焼くのが社会福祉？」

ヒュパティアが皮肉っぽく言うと、男は話題を変えた。

「……先月も老婆が数人で抗議に来たでしょう？」

「ええ、アレクサンドリアキリスト基督教婦人矯風会だっけ？」

シヤハラザードが知る由もない話である。ただ——治安維持法とかにすぐ賛成しそうな名前ね——と何故か思った。

「でも……あの老婆は実際にはあなたよりも若いのもかもしれないですよ」

「……何が言いたいわけ？」

ヒュパティアの眉がぴくぴくと動く。

「正確な年齢すらわからない者が今のこの国には大勢いるという事です。あの後、調べましたが、前後の記録から推定して、彼女たちはおそらくまだ三十前です。……わかりますか？ 三十にもなっていないのに、腰は曲がり、顔は皺だらけの老婆がいるのです。貧しさとはそういう人間をつくってしまうのです。ほぼ間違いない文盲でしょう。当然、キリスト教徒を名乗っていても、聖書をまともに読むことすらままならない……」

そんな老婆にこの図書館の価値がわかるはずがない。ただ、飯を与えてくれる者に従うのみだ。そして、この世界に生きる者のほとんどは、あの老婆のように地べたを這い蹲っているのだ。

真理の探究者であり、天体の観察者であったヒュパティアはこれまで上ばかり見ていた。

だから、足元であえぐ者を知らないのだ。それこそ、最も親しいと思っていた奴隷の心すら、本当はつかめていなかった。

ヒュパティアは『祈る前にあがけ』という女である。

だが、彼は『祈る事そのものがあがきなのだ』という男だったのだ。

「無論、あの老婆にもこの図書館の価値がわかる日は来るはずです。あの老婆が食む小麦とて、度重なる品種の改良や灌漑の改善により、収穫倍率を極限まで高めた人知の産物なのですから。ですが、その日までは我らもまた耐え忍ばねば……」

そこで男は口を止めた。

ヒュパティアが幼子のように——あるいは幼子らしく——ポロポロと泣いているのを目にしてしまったからだ。

「続けなさい……」ヒュパティアは男を促す。「あたしの劣勢だけど、嬉しいわ。お前が立派に論戦を張るようになったのだから」

「……いえ、既に私の趣旨は伝え終わりました。これ以上、語る必要がありません」

「そう。では、あたしもこれは明言しておく。今のお前は自らの足で立っている。もうあたしの奴隷ではない」

「いえっ、私はっ……!!」

男は抗弁しようとし、思いとどまった。

眼を濡らしたヒュパティアが、しかし、聖母のように微笑えむのを見てしまったのだ。

「祝福すべき事だわ。いつも言っているでしょう。考えるあなたの権利を保有して下さい。何故なら、まったく考えない事よりは誤った事も考えてさえすれば良いのです——と」

既に奴隷ではいられなくなってしまった男は項垂れる。

それでも、ヒュパティアは丁寧な語りかける。

「故にこれは懇願です。明日までにあなたの考えに書面をまとめて下さい」

下を向いたままの男は嗚咽を漏らし、小さく拳を握った。

ヒュパティアはそれを以って同意と受け取ったのか、最後にとんでもない事を言った。

「朝一番にあたしがキュリロスに会いに行くから」

これには傍観者のシヤハラザードも息を呑んだ。

アレクサンドリア及び全アフリカの教皇・総主教キュリロス——彼こそがこの図書館を潰そうとするキリスト教徒の統括者なのだ。

そして、キュリロスはレオ十三世により『教会博士』として聖人に叙される程の男だった。

\*\*\*

かつての【アポスタタ背教者】が極めて不自然な戦死を遂げた日か？

あるいは【ウエスタ処女神】の火がキリスト教徒に消された日か？

いずれにせよ、既にこの帝国は一神教によって『溶解』されている。

ヒュパティアも、事ここに至って、認めざるを得なかった。

そうしたら馬車の上で自分の白髪に気付いた。

——歳を考えれば、当然か……。

あの男があんな事を言い出す時代になったのだから。

付いていくと言いつ張った彼を押し切って、ヒュパティアは一人で行くと決めたのだから。

——「ここであたしが逃げたら、すべてが終わる。この帝国の——この世界の衰退を認めるわけにはいかない」

あの発言は間違いだった。

既に終わっていたのだ。

もはや、哲学は破局を迎え、宗教の支配が始まりつつある。

——『まさに【暗黒時代】の始まりだ。虫唾が走る！だが、それが避けられぬならば、その害毒を薄め、その期間を縮める努力をすべきだ。人類が再びその英知を取り戻そうとした時に、すべてが消失してしまったが故の混乱で、闇夜を長引かせる事があってはならない。無知が世界を支配するのなら、せめてそれが一万年ではなく、一千年で終わるようにすべきなのだ。だから、

我々はいずれくる【再生】<sup>ルネサンス</sup>のための【基盤】<sup>ファウンデーション</sup>を築かねばならない……！」  
これこそ彼が一夜で仕上げた意見書の要綱である。  
「……見事」

ヒュパティアは感嘆するしかない。この理念についてもそうだし、この後に続く『具体的撤退案』も、また実践的である。

ヒュパティアの使命は倒れる大樹を支える事ではなかったのだ。  
枯れゆく大樹の種子を一つでも多く拾い集める事だったのだ。

そして、その種子を散布し、次の世代に希望を託す事なのだ。

……ヒュパティアには逆立ちしても出てこない発想である。冬の寒さを知り、耐え忍ぶ辛さを知り、それもまた強さであると知る者のみが至れる境地であろう。この点に限れば、彼の視野はヒュパティアよりもはるかに広く深い。

「ふふっ。まさか、あたしが彼に嫉妬する日が来るとはね……」

だがこれなら、キュロスとの面会も単なる自棄になった『抗議』から、明確な目標を持った『交渉』へと昇華させる事が出来る。

「キリスト教の覇権を——腸<sup>はらわた</sup>が煮えくりかえるが——認める。その代わりに蔵書を外界へ運び出す暗黙の了解を得る」

異教徒の種を安全にアレクサンドリアから排出できるので、キリスト教徒にとっても悪くない取引だ。またヒュパティアにはよくわからないが、彼によると、人間とは『敵』を作る事で一致団結する生き物だという。したがってキュロスのような指導者階層にとって『異教徒』<sup>バガヌス</sup>の存在はむしろ権力強化のための……。

その時、背後から衝撃が襲った。

何事かと振り向くと、修道士たちが馬車に無理矢理乗り込んで来ている。

詰問しようとするよりも早く、彼らはぎらついた視線をヒュパティアに向ける。

それは狂信者の目だった。

「神の教えに逆らう魔女め……！」

なお、この事件は人類史上初の魔女狩りとも言われている。

\*\*\*

終焉はあつという間にやってきた。

怒涛の如く押し寄せる暴徒の群れに、アレクサンドリア図書館は瞬く間に制圧された。

指導者不在の隙を突かれたという意見もあったが、実際はそういう次元の問題でもあるまい。仮にヒュパティアが陣頭指揮を執っていたとしても結果に大差はなかっただろう。図書館とは所詮非武装組織であり、『図書館戦争』など夢のまた夢である。それこそ、一神教の暴徒に武器を持たぬ者への配慮を求めるようなものだ。

燃やされる図書館。

悦び震える狂信者。

人類の英知は悪魔の技術と踏みにじられ、真理の探究者は悪魔の崇拝者として裁かれた。

その光景に一人のユダヤ人が悄然と立ち尽くし呟いた。

「この世界は……もう終わりだ」

そうかもしれない。

これまでに人類の文明は——幾つもの世界は生まれては滅ぶという事を繰り返している。

気候の変化、環境の破壊、戦争、内乱……理由を挙げればきりが無い。だが、事ここに至ってしまえば、破局は避けられるまい。

大地が丸いという知識ですら、忘れてしまうかもしれない。

てこの原理で大岩を動かせるという知恵すら、覚えてはいられないかもしれない。

学問という夜を照らす灯火を消してしまったのだから……。

地獄の如き混乱の中、シャハラザードがあの男と合流できたのは僥倖だった。

とはいえ、農牛のような男も憔悴しきっていた。無理もないとシャハラザードは思った。異端狩りと異教殺しに熱狂するキリスト教徒の群れをかくぐり、情報収集にあたっていたのだから。

しかし、それは違った。甘かった。彼の憔悴は懊悩の結果だった。

「お嬢様は……殺されたそうです」

それが男の第一声だった。

「……キュリロスに面会に行く途中、キリスト教修道士達に馬車を襲われ、教会に拉致監禁され、着衣を剥がれ、全裸にされた後、牡蠣の貝殻で生きながらにその肉を削ぎ落とされ、鬻り殺しにされたとの事です……」

「……嘘でしょう」

シャハラザードは最初信じなかった。

というよりも、疑ってかかった。

勿論、信じたくなかった。

そもそも【有害図書】を焚書検閲せよと言う者として、一応は道德の充実を志し、犯罪の撲滅を目指していたはずだ。

無論、『道德』や『犯罪』の定義とは様々であり、相対的なものである。

しかし、しかしである。

無力な女性を大勢で誘拐し、よってたかつて服を剥ぐ事が『道德』なのか？

違う意見を持つというだけで、縄で縛り肉を削ぎ落として殺す事は『犯罪』ではないのか？

いや……。

「無論、流言飛語の類の可能性もあるのですが……」

彼が蒼白のまま述べた楽観論が、かえってシヤハラザードに苦い現実を思い知らせた。

「……ヒュパティア殿の死は事実でなくとも真実でしょう。そして、それが問題なのです」

「どういう意味です？」

「ヒュパティア殿の死を誇らしげに語っているという事は、彼らにとってそれが望ましいという事です」

ひよっとしたら、ヒュパティア殿の最期はもつとまともなものだったかもしれない。あるいはキリスト教徒とは無関係の病死や事故死かもしれない。それどころか、生きてどこかに逃げのびているのかもしれない。

第一、この無残な伝聞が事実であったとしても、キリスト教徒にはそれを隠蔽することも脚色する事もできたはずなのだ。

「しかし、彼らにはあえて選んだのです。『自分たちは寄つて集つて一人の女性を襲い、服を剥ぎ、縄で縛り、生きながらに肉を削ぎ落とし、斃り殺しにした』という結末を望んだのです。しかもそれを狂乱ではなく、正義として称賛している。この価値観の隔絶の方が、はるかに恐ろしい」

詳細の確認はまだ先の話だが、単なる一教徒ではなく、修道士による実行という事は、それがキリスト教徒の総意であると見做してよい。それでもなお一部の暴発だったなら、キュリロスはそのを公式に弁明できる立場にあるのだ。

だが、図書館への破壊活動にしても、ヒュパティアへの虐殺行為にしても、キュリロス率いるキリスト教徒たちは恥じていない。むしろ、自身の手でそれを行った事を声高に自慢している。それが恐ろしいのだ。

例えば、ある歴史書に『聖将』と二つ名される軍人がいたとしよう。彼は優れた政治家であり、秀でた戦略家であり、異民族に蹂躪されていた聖地を奪還した英雄であり、しかし、慈悲深く、異民族であつても女や子供は決して殺さず、それどころか困窮していれば、むしろ進んで財産を分け与え、多数の捕虜を解放し、大学や学者を厚遇し、自身は己の宗教的義務に殉じながらも、他者には常に寛容だった——と書いてあつたとしよう。

胡散臭い軍人、胡散臭い歴史書である。

だが、それが事実か否かはともかくその価値観には賛同できる。

動機はどうあれ、他者にとって有益な『偽善』を行えと。

理念はどうあれ、他者にとって有害な『独善』を避けること。

だが、そんな当たり前と思える事ですら、当り前でない輩がヒュパティアを殺したと自慢げに

吹聴している。

シャハラザードは身震いした。両手で自身の瘦躯を抱きしめた。

今まで自分は偽善を心のどこかで嗤っていた。

しかし、それは独善という悪に囲まれた経験のない甘ちゃんだったという事なのだ。

そして、独善を体現するキリスト教徒と必死に戦っていたヒュパティアは死んだ……。

「価値観の隔絶——ですか」奴隷は初めて苦々しい毒を吐いた。「私はあなたのそういう婉曲なところが嫌いだったんですよ」

「……そうですね。あなたの主たるヒュパティア殿なら、はっきりと言うでしょう。図書を焼き、言論を封じ、技術や知識を伝える事をやめた社会は文明の維持そのものができなくなる——と」

それでなくとも、アレクサンドリア図書館はその名の如くアレクサンドロス大王以来、数多の文明変遷を乗り越えてきた超時代的な存在だった。あの真理の探究者ヒュパティアはまさにその申し子だった。それをキリスト教徒は……、

——……この帝国だけではない。人類の文明そのものが衰退の季節を迎えるのかもしれない。

シャハラザードの予測は的中する。

この後、西洋はいわゆる【The Dark Ages 暗黒時代】に突入するのだ。

前述の天体観測儀が千年以上後まで使われるのも、ヒュパティアが天才だったからではない。文明がこの後千年間停滞するからだ。たかだか『バカ女』の造ったアナログコンピュータを命綱として、大海を渡る事に疑問を抱かない程に退化してしまうのだ。

そこで農牛の如き男は一巻の本を差し出した。

「……『管子』ですか」

「はい。件の一説の出典であり、あの方の最後の仕事でした。……この図書館にとっても最後の仕事となるでしょう」

「……確かに受け取りました」

そう言いながら、シャハラザードは手にした重みにふらついてしまった。あの火の中から持ち出せなかった書物は数知れないのだから……。だが、それでも己の義務を果たさねばならない。

「もっと早く告げるべきでした。東方オリエンへの亡命をお望みなら、私にはツテがあります……」

ギリギリの発言であったが、彼は乾いた笑みを浮かべるのみだった。

「はい。ササン朝への亡命希望者一覧がその『管子』の中に挟んであります。個々のペルシア語、ギリシヤ語についての習熟等も記してありますから、是非ともご配慮ください」

「……」

やはりこの男は可愛げがないとシャハラザードは思った。

この申し出を予想し準備していた事もそうだ。こちらは『オリエン東方』の縁者としか言っていない。なのに、彼はシャハラザードをはつきりとササン朝ペルシア帝国の一味と見做している。

しかし、シャハラザードは彼の意に沿うしかない。この狂乱から少しでも多くの人間と英知を

救い出さねばならないのだ。ところが、目を通してある内に奇妙な事に気付いた。

「……あなたの名前が見当たりませんが？」

すると彼は「私は亡命しません。ここに留まるつもりです」と首を振り、そしてとんでもない事を言い出した。

「私はキリスト教徒になります」

「……どういうことですか？」

「あの方の指示ですよ」

指導者ヒュパティアが殺されるに到った時、もしくは奮闘むなくアレクサンドリア図書館が消失した時、あるいはその両方という最悪の事態に、残された者がどう行動すべきか？

ヒュパティアは常日頃から、次のように語っていたという。

『まず保身を第一に考え、次に離散ディアスポラを行きさない。これは権利ではなく、義務である。ここで知識の収集編纂に勤しむ諸君ら一人一人こそが既に人類英知の結晶だから——必ずや生きて次の世に真理イデアの灯火を残さない』

……もつとも、これについてはヒュパティアの指示を仰ぐまでもなかった。この虐殺を知った多くの哲学者はキリスト教徒を恐れ、アレクサンドリアから逃げ出す事になるのだ（なお、この『異教徒を追放した功績』によってキュリロスキリロスは聖人に叙されている）。

だが、あの日、この男にだけは別の指示を下したという。それが、

「あえて、キリスト教徒となつて、彼らを内側から教化啓蒙すべし——という事ですか？」

「は」

「……自分の発言に責任を持つ——と？」

「私もそれを勘繰ったのですが」農牛の如き男は大きくため息をつく。「たとえば、それが哲学にとつては『不幸な結婚』であつても、灯火を残す者は必要だと——それが【再生ルネサンス】への道だとおっしゃっていました」

愚痴っぽい口調だったが、彼はまんざらでもなさそうだった。

あのだこまでも高潔だったヒュパティアらしくもある。

だが、シャハラザードにはわからなかった。

「彼らを赦せるのですか？——あなたが愛しておられたヒュパティアを殺したキリスト教徒を」

「私は……いえ、私が赦します。赦すに値する存在にして見せます」

殉教者——そんな言葉がシャハラザードの脳裏に髣髴する。

それは彼女の事なのだろうか？

それとも彼の事なのだろうか？

そこでようやくシャハラザードは『キリスト』の名を耳にした時の動揺を理解した。

新約聖書にある救世主【ナザレのイエス】は全ての罪を赦すために生まれてきたという。それはひよつとしたら、彼のような男だったのかもしれない。

「……くそくらえだわ」

「は？」

「聞こえませんでしたか。私はくそくらえだと言ったんです。あなたの事は許します。しかし、私は彼らを赦すつもりはありません。赦すべきでもありません」

結局、そういう男なのだろう。彼はシャハラザードを憐れむ目で見てきた。

男のそんな姿が無性に腹立たしく思わず背を向ける。

「私は外から彼らを駆逐する語り部となります」

「語り部？」

「ええ、妹にはよく昔語りをしたものです」

「言論で挑むと？ 私が言うのも何ですが、無謀に思えます。【千夜】<sup>ハザール</sup> 説いても彼らを正せるかどうか……」

「ならば、【千夜 <sup>アルフ・ライラ・ワ・ライラ</sup> 一夜】と説くまでです」

ヒュパティアの死から約二百五十年後、イスラム教徒がこの地に辿り着いた時、図書館は既に影も形もなかった。そのため、灰塵荒野の中からギリシャローマ文明の残滓を拾い集める事が彼らの歴史的な役割となった。

しかし、やはり失われたものは戻らない。

古代アレクサンドリア図書館の正確な位置すら、現代ではもうわからなくなってしまっている……。

\*\*\*

「でも、もしも人類がこの千年の闇を乗り越えられたなら、次があるのなら……」

「了」